

# 張家山漢簡《津関令》と漢墓簡牘

——伝と致の情報伝達——

藤田 勝久

はじめに

- 一 漢代の交通と「伝」の形態
- 二 「伝」と「致」の形態——随行物の証明書
- 三 関所の通行と漢墓簡牘  
おわりに

## はじめに

中国の出土資料は、その出土状況によって大きく三つに分けられる。<sup>(1)</sup> 一は、甘肅省の敦煌、居延漢簡に代表されるように西北フィールドの遺跡から発見された簡牘資料である。これは前漢武帝期より以降の行政文書が多い。二は、古墓に副葬された簡牘、帛書などで、戦国、秦漢時代の文書や書籍などである。三は、二〇世紀末から発見されはじめた井戸の簡牘資料である。これは故城の官府から出土したという点で、フィールド遺跡の文書などと共通する性格

をもっており、秦代の里耶秦簡がもっとも早く、前漢、後漢、三国呉簡へとつづいている。

こうした簡牘・帛書の研究は、歴史学や思想史の分野によって、その関心が異なっている。たとえば歴史学では、行政文書の分類や、睡虎地秦簡と張家山漢簡などの法令を中心として、法制史などの研究が進められている。<sup>(2)</sup>ここでは古墓の書籍は、漢代學術にかかわる資料として、あまり注目されていない。これに対して思想史の分野では、むしろ古墓の資料である郭店楚簡や、上海博物館藏楚簡、馬王堆漢墓帛書などを中心として、思想の成立や、書誌学的な研究が大きく進展している。<sup>(3)</sup>しかし両者を結び視点は少ないようにおもわれる。また遺跡から出土した資料は、当時に保存されたり廃棄されたものが、偶然に発見される場合が多いのに対して、古墓の資料は、人々が意識的に副葬したものであり、その性格の相違をどのように理解するかという問題がある。

このように簡牘・帛書の研究では、出土状況や関心の違いをこえて、それを社会のなかで全体的に位置づけようとする視点は少ない。それでは古代社会のなかで、出土資料を全体的に理解することはできないのであろうか。私たちは、それを読み解く一つの視点として、資料がもつ「情報の伝達」、すなわち発信と受容という点に注目している。<sup>(4)</sup>つまり資料は、誰かが作成して発信し、それを誰かに伝達するという目的をもっている。中国古代では、『史記』や伝来の文献は、その最終的な記述を収録しているが、出土資料は、その出土状況や形態によって、社会のなかで情報伝達される過程を直接的に示している。この点に注目すれば、行政文書や、古墓の資料という区別をこえて、両者を結ぶ社会的な視点が提示できるのではないかと考える。

そのとき一つの分野となるのは、行政機構で順次送られる文書とは違って、人びとの移動によって伝えられる公私の情報である。その典型的な例は、「伝」と呼ばれる通行証である。とくに公用の「伝」は官府が発給し、旅行者が携帯して関所などを通過し、車馬や宿舎、食事が支給されるものであるが、ここには交通にかかわる情報の伝達があ

かがある。また「伝」の形態は、大庭脩氏や中国の研究者が考察しているが、大庭氏の独創的な点は、古墓から出土した簡牘に、伝と似た内容（告地券、告地策など）があり、それを「冥土への旅券」として紹介されたことである。<sup>(6)</sup>ここでは現実の交通と、古墓に埋葬された擬制文書とのかかわりを指摘しており、まさに遺跡と古墓の資料を結び視点を提示したものである。

大庭脩氏が、こうした見解を発表されたあと、張家山漢簡《津関令》<sup>(7)</sup>や、敦煌懸泉置漢簡などの資料が追加できるようになった。<sup>(8)</sup>そこで本稿では、あらためて漢代の交通と「伝」の問題を考えてみたい。そのとき「伝」と並んで、同じような用途をもつといわれる「致」についても検討を加える。<sup>(9)</sup>その上で、地上の交通にみえる「伝」「致」と、古墓の簡牘資料とのかかわりを再検討し、社会のなかで出土資料を位置づける接点を見いだしたいとおもう。

## 一 漢代の交通と「伝」の形態

漢代の初期では、水陸の関所（水路の津、陸路の関）を通行するために「伝」や「符」という証明書が必要であった。それは漢簡《津関令》に、いくつかの規定がみえており、すでに李均明、陳偉氏などの考察がある。<sup>(10)</sup>

一 御史言。越塞闌關。論未有□。請闌出入塞之津關。黥爲城旦舂。越塞。斬左止（趾）爲城旦。吏卒主者弗得贖耐。令、<sup>(11)</sup>丞、令史罰金四兩。智（知）其請（情）而出入之。及假予人符傳。令以闌出入者。與同罪。非其所□爲□而擅爲傳出入津關。以□<sup>(12)</sup>傳令闌令論。及所爲傳者。縣邑傳塞。及備塞都尉、關吏、官屬、軍吏卒乘塞者□其□□□□□日□□牧□□<sup>(13)</sup>塞郵、門亭行書者。得以符出入。・制曰、可。<sup>(14)</sup>

（四八八―九一簡）

一 御史大夫が言す、「塞を越え関所を闌みだりにすること〔越塞、闌関〕は、論に未だ（満たすものが）有りません。そこで以下のことを要請いたします。塞の津関を（符や伝が無くして）闌に出入するものは、黥して城旦舂とする。塞を越えるものは、左趾を斬つて城旦とする。／吏卒の主する者が逮捕できなければ、贖耐とする。〔県令や丞、令史は罰金四両とする。／その事情を知つていながら関所を出入させたり、及び人に符や伝を貸し与えて、以て闌に〔塞の津関を〕出入させた者は、与ともに同罪とする。／その……所……非ずして、擅はしりまに伝を偽造して津関を出入するものは、（公文書を偽造して使用した）伝令・闌令を以て論じ、伝を偽造した者にも及ぼせ。／県邑の伝塞にあるもの、及び備塞都尉、関吏、官属、軍の吏卒で塞に配置する者は、……其……日……牧……。／……塞の郵、門亭で（公文書を伝送する）行書の者は、符をもつて出入できる」と。

●制に曰く可なりと。

（四八八―九一簡）

この条文の闌について、注釈は『漢書』汲黯伝に引く臣瓚注に「無符伝出入為闌」とある解釈にしたがう。また越は、集釈が『唐律』衛禁律の疏議に「越度者。謂関不由門、津不由濟而度者」とあるのを引く。これらによれば「越塞、闌関」とは、関所より以外の他所を通過した場合と、符や伝の証明を持たずに津関を通過する場合を指すことになる。そして本条が追加された理由は、これまでの規定が不十分であったか、あるいは「塞の津関」に対して明確化したものかもしれない。ともかく本条では、A 闌関・符や伝が無くして闌に出入する者を「黥して城旦舂」とし、B 越塞・門や渡し場以外の場所から出入りする者を「左趾を斬つて城旦」とすることを要請している。またそれを見逃した官吏たちについても、罰則の規定がある。

ここで確認できるのは、1 津関の通行に「伝」や「符」が必要であること、2 他人に「伝」や「符」を貸与する場合も同罪であること、3 「伝」の偽造に罪があること、4 塞の郵や門亭で公文書を伝送する者は「符」を用いてよい

ことなどである。これによつて「伝」と「符」には、用途の違いがあることがわかる。

また「伝」「符」では、他人の証明を使つた者にも「贖城旦春」の罪がある。

□ 相國上内史書言。請諸詐（詐）襲人符傳出入塞之津關。未出入而得。皆贖城旦春。將吏智（知）其請（情）。與同罪。・御史以聞。・制<sup>10</sup>曰、可。以□論之。497  
（四九六―九七簡）

□ 相國が内史の書を上つて言う。「請うらくは、諸々の人の符・伝を詐つて使い塞の津關を出入しようとして、未だ出入せずに捕らえられたものは、皆な贖城旦春とする。將吏がその事情を知つていれば、与に同罪とせん」と。・御史大夫が以て上聞する。・制に曰く可なりと。……を以て之を論ぜよ。（四九六―九七簡）

「符」については、すでに多くの研究があり、その形態や用途が明らかになっている。その要点は、つぎのようになる。<sup>(11)</sup>「符」は、六寸（約一三・八センチ）を基準として、二つを合わせて割り符とし、側面に刻みをもつものがある。一方を関所が持ち、もう一方を通行する者に渡して、帰るときに確認することになる。したがつて符は、一ヶ所で用いる通行証といわれる。それに対して「伝」は、長距離の通行をするときに用いられたという。

このとき「伝」を用いる公用旅行者には、車馬や宿泊、従者、食事などが提供されたことが、睡虎地秦簡「伝食律」や張家山漢簡「伝食律」によつて知られている。<sup>(12)</sup>このほかにも『津関令』や『奏讞書』には、関所と「伝」との関係を示す資料がある。<sup>(13)</sup>

それでは「伝」の形態は、どのように考えたらよいのだろうか。大庭脩氏は、直接的な資料が少ないため、つぎのような居延漢簡の例をあげている。<sup>(14)</sup>

元延二年七月乙酉。居延令尚、承忠。移過所縣道河津關。道亭長王豐。以詔書買騎馬酒泉・敦煌・張掖郡中。當舍傳舍從者。如律令。／守令史詡、佐褒。七月丁亥出。

一七〇・三A

## 居延令印 七月丁亥出。

一七〇・三B

ここでは居延県の令と丞が、通行する津関に対して、旅行者の用件を告げる形式となっている。この簡は、写真を見ると、月日と名前、用件、交通の条件などを、二行にわたって続けて書写し、しかも文末には守令史などの追記がある。また裏面には「居延令印」があったことを記している。したがって、この資料は「伝」の実物ではなく、その写しであることが明らかである。それでは「伝」の原形を知ることとはできないのだろうか。

これについて李均明氏は、敦煌懸泉置 I 90DXT0309③: 237 宣帝神爵四年（前五七）の例を追加されている。<sup>(15)</sup>

神爵四年十一月癸未。

丞相史李尊、送護神爵六年戌卒。河東・南陽・潁川・上党・東郡・濟陰・魏郡・淮陽 国詣敦煌郡・酒泉郡。因迎罷卒送致河東・南陽・潁川・東郡・魏郡・淮陽国。并督死卒傳（檣）。

為駕一封軺傳。

〔下段〕御史大夫望之謂高陵。以次為駕。當舍傳舍、如律令。

〔日付〕神爵四年十一月癸未

〔用件〕丞相の史・李尊が、内郡の戌卒を護衛して敦煌・酒泉郡に送り、任務を終えた卒などを内郡に帰す。

〔交通〕「一封軺傳（軺車）」を利用する。

〔発給〕御史大夫の（蕭）望之が、高陵県に命令する

〔命令〕施設ごとに車の手配、宿泊は、律令の如くせよ

この資料は、写真をみると上下の二段に分けて書かれている。上段には、日付と人物、用件、交通利用の条件を記して、下段には、発給した官府の長官が命令を下す過程を記している。この簡牘を、居延漢簡の例とくらべてみると、

中央と地方の官府が発給するという違いがある。しかしその形態は、居延漢簡の場合が、「伝」そのものではなく、その内容を写したものであることがよくわかる。

それでは、この資料は一般的な「伝」の形態を伝えているのであろうか。これについては、懸泉置漢簡の元帝永光五年（前三九）《失亡伝信冊》II 0216<sup>②</sup>が参考となる。<sup>16)</sup>

1 永光五年五月庚申。

御史大夫弘謂長安。以次

守御史李忠監營麥祠孝文廟。守御史任昌年。

爲駕。當舍傳舍、如律令。

爲駕一封軺傳。

外百卅二

②866

2 永光五年六月癸酉朔乙亥。御史大夫弘移丞相、車騎將「軍」、中二千石、郡大守、諸侯相。五月庚申。丞相少

史李忠守御史。假一封傳信。監營麥祠

②867

3 孝文廟事。己巳。以傳信予御史属澤欽「受忠傳信。置車軺中。道隨（墮）亡。今寫所亡傳信副。移如牒。書到。

二千石各明白布

告属官縣吏民。有得亡傳信者。予購如律。諸乘傳驛駕厩令長丞。亟案莫傳有與所亡傳同封弟（第）者。輒捕

②868

4 「繫」。上傳信御史府。如律令。

七月庚申。敦煌太守弘、長史章、守部候脩仁行丞事。敢告部都尉卒人。謂縣官「寫移。書到如律令。／掾登、属

建、佐政光

②869

5 七月辛酉。效穀守長合宗、守丞、敦煌左尉忠告尉。謂鄉、置寫移。書到如律令。

②870

- 6 敦煌守長聖、守丞福。②871
- 7 湫泉守長長、丞馴。②872
- 8 效穀守長合宗、丞殷。②873
- 9 廣至守長光、遂事、守丞賞。②874
- 10 冥安長遂昌、丞光。②875

11 七月庚申。敦煌太守弘、長史章、守部候脩仁行丞事。謂縣。寫移使者稱縣置。謹敬莊事。甚有意。母以謁勞。書到。務稱。母解（懈）隨。如律令。／掾登、屬建、書佐政。②876

《失亡伝信冊》は、つぎのように構成されている。まず2～3簡をみると、永光五年六月乙亥の日に、御史大夫の鄭弘が、車騎將軍と將軍、中二千石と二千石の官、地方の郡太守、諸侯王國の相などに出した命令である。その内容は、五月庚申の日に、李忠という人物が守御史となつて、孝文廟の祭祀を担当するために「伝信」を發給したという。しかし李忠に渡したあと、その「伝信」を車に置き忘れて紛失してしまつた。そこで副本を写して伝達するので、それを各々が県の吏民に布告して通達せよというものである。そして紛失した伝信を見つけた者に謝礼を与えることや、乗伝や駅駕・厩など宿場を担当する長が檢査して、同じ番号の伝信を所持する者を逮捕することを述べている。以下、4簡につづいて、紛失した伝信は御史府に送ることを命じている。そして命令が届いたあと、七月庚申には、敦煌太守の弘たちが、下部にある部都尉の卒人たちに伝達している。そのため冒頭の第一簡に、紛失した「伝信」の副本を引用しているのである。

そこで第一簡の写真（『文物』二〇〇〇年五期、『出土文献研究』第七輯）をみると、その形態は上下二段に分かれて書かれており、たしかにDXT0309③：237の形態とよく似ている。しかし異なるのは、『失亡伝信冊』の第一簡に



「外百冊二」という番号を記すことである。したがって第一簡の副本は、実物の「伝」の形態を、きわめてよく伝えるものとみなすことができる。「伝」の規定は、一尺五寸（約三四・五センチ）<sup>(17)</sup>とあり、実物の寸法はなお不明であるが、ここに公用旅行における「伝」の一形態が明らかになったといえよう。

すなわち公用の「伝」は、その上段に日付と人物、用件、交通利用の条件、通し番号を記している。そして下段には、発給した官府の長官が命令を下す過程と、「当舎伝舎、如律令」という決まり文句を記している。中央官府で作成された「伝」は、その副本を保管しながら、一方で現物は旅行者に渡されている。しかし関所や宿場などでは、これを確認することがおこなわれ、地方の居延漢簡の場合では、その内容を令史などが写している。さらに稀なケースであるが、紛失した場合には、それを搜索する文書の一部として、発信側の「伝信」の写しが伝達されることがあった。

さらに張徳芳氏は、懸泉置の伝信に関する五二簡を紹介しているが、ここでは①上下に分けて記す形式（番号のあるもの、無いものをふくむ。また書写人の名を記す簡もある）、②内容を連続して書写する形式が確認できる。<sup>(18)</sup>

このように懸泉置漢簡は、前漢末の資料であるが、その形態を手がかりにすると、津関令にみられた前漢初期の「伝」の形態と、その使用方法の一端が推測できると考える。

## 二 「伝」と「致」の形態―随行物の証明書

官府が発給する「伝」には、公用旅行のほかに、私用の旅行に対する証明書がある。つぎに私用の「伝」と、「致」の形態について検討してみよう。

大庭脩氏によれば、私用旅行者の証明書を以下のように説明している。<sup>(19)</sup> その例は、居延漢簡一五・一九簡である。

永始五年閏月己巳朔丙子。北郷嗇夫忠敢言之。義成里崔自當。自言為家私市居延。謹案自當母官獄徵事。當得取傳。謁移肩水金閼・居延縣索闕。敢言之。

閏月丙子。爰得丞彭。移肩水金閼・居延縣索闕。書到如律令。／掾晏・令史建

これによれば、成帝の永始五年（前一二）閏月の丙子（六日）に、爰得県の北郷嗇夫の忠が、崔自當という人物の私用旅行のために、用件と用務地、官獄や徴発がないという「伝」を得る資格を、県廷に申請している。そこで爰得県の丞は、同じ日に肩水金閼と居延県の索闕に宛てた文書を発信している。このとき末尾に掾と令史のサインがあることで、やはりこれは文書の現物ではなく、写し（控え）であることがわかる。

大庭氏は、こうした文書の形式を、①日付、②請求者（旅行者）の所在と郷嗇夫名、③旅行の目的、④旅行者に前科のない証明、したがって伝を得る資格があること、⑤目的地まで通過するはずの津関名が書かれ、それは郷嗇夫が津関の吏に対する上申文書の形式をとるといわれる。これに続いて、県令または丞が書いた部分は、嗇夫の文書を承認して、津関の吏に命ずる下達文書の形式をもつという。

この説明には、なお不明な点がある。まず手続きが、旅行者の所在する郷里から申請され、それが県廷によって発給されていることは確認できる。しかしこれがそのまま旅行の証明になるかという点、文面には、この人物が官獄や徴発に関連せず、「伝」を取る資格があると述べている。とすれば、ここでは二つの形態が予想される。すなわち一は、この申請書によって承認された県の発給文書が、「伝」としての役割を果たすということである。このとき居延漢簡の写し（控え）の文書が、その形態を推測させる資料となる。その二は、この申請によって別に「伝」を取得するという点である。この場合、私用旅行の「伝」にあたる文書の形態は不明である。

いずれにせよ、この資料からわかるのは、県の下部組織の官吏が申請をして、県廷がそれを発給する単位になっていることである。そのとき証明に必要な条件は、①日付、②旅行者の所在と担当の官吏名、③旅行の目的のほか、とくに④前料がないなどの伝を得る資格を明記している。このように「伝」は、公用旅行であっても、私用旅行であっても、いずれも公的な官府が発給している。ただし居延県令が発給した公用の伝（一七〇・三A）と形態が異なるのは、申請の手続きによる違いであろう。

ところで、公用旅行の「伝」では、身分や爵位によつて等級があるが、車馬などの交通手段や、宿泊、食事などが用意されるものであった。しかし私用の旅行では、当然、交通手段や食事などは自弁であり、随行する物品や従者などに制約があったはずである。また公用旅行の場合でも、私的に随行品を携えるときには、なんらかの規制があったとおもわれる。これにはどのように対応したのだろうか。

もう一度、張家山漢簡《津関令》をみてみよう。まず馬の随行について、「伝」と「書」で規定しているのは、以下の条文である。

・丞相上魯御史書。請魯中大夫謁者得私買馬關中。魯御史爲書告津關。它如令。・丞相、御史以聞。制曰、可。

（五二二簡）

・丞相上魯御史書。請魯郎中自給馬騎。得買馬關中。魯御史爲傳。它如令。丞相、御史以聞。制曰、可。

（五二二簡）

この条文は、いずれも魯国の御史が、丞相に法律を申請して、皇帝の裁可を受けたものである。その内容は、五二一簡では、魯の中大夫謁者が私に馬を関中で買った場合、魯の御史が、「書」を作成して津関に告げるようにしたいと請求している。五二二簡では、魯の郎中が騎馬を関中で買った場合に、魯の御史が「伝」を作成することを請求す

るものである。ここでは、郎中の騎馬は「伝」でよいのに対して、中大夫謁者の私馬の場合は、「書」を作成することが注意される。

そこで「書」の性格を明らかにするため、他の条文をみると、つぎのような例がある。このとき馬に関する条文は、陳偉氏が釈文を修正しており、ここではこの復元にしたがう。(△は重複記号を文字にしたもの)

□ 相國上中大夫書。請中大夫謁者・郎中執盾・執戟家在關外者。得私買馬關中。有縣官致上中大夫・郎中。中大夫・郎中爲書告津關。來。復傳。△△出。它如律令。御史以聞。請許。及諸乘私馬出。馬當復入而死亡。自言在縣官。縣官診及獄訊審死亡。皆津關。制曰、可。△△ (五〇四、五〇八簡)

□ ……議。禁民毋得私買馬以出〔扞〕關、鄖關、函谷〔關〕、武關及諸河塞津關。其買騎・輕車馬・吏乘・置傳馬者。縣各以所買△△名匹數告買所内史・郡守。内史・郡守各以馬所補名爲久△△馬。爲致告津關。津關謹以藉(籍)・久案閱。出。諸乘私馬入而復以出。若出而當復入者。△△津關謹閱出入。馬當復入不入。以令論。・相國・御史以聞。・制曰、可。△△ (五〇六・〇七、五〇五簡)

五〇四、五〇八簡では、中大夫の謁者、郎中の執盾・執戟の官で、関外に家があり、関中で私用の馬を買った場合に、県官の「致」があれば中大夫と郎中に申告する。そして中大夫と郎中は「書」を作成して、津関に告げるという内容である。また五〇六・〇七、五〇五簡では、書き出しが不明であるが、まず原則として、私に馬を買って函谷関などの津関を出ることを禁止している。そこで騎馬や軽車の馬、吏の車や置伝の馬を買うときには、県が馬の名と匹数を、行政官庁である内史や郡守に申告する。内史と郡守は、それらの馬の名称にあたるものを作り、それを「致」として津関に告げる。津関では、その文書にもとづいて名称などを検査して、やっと出させることになる。そのとき、私馬で津関を出入りすることを禁止している。

これらを見れば、私に馬を買った場合には「書」などの文書を作成し、それを「致」として申告したり、津関に告げている。この「致」は、釈文の注釈では文書と理解し、李均明氏は「通知書」としており、陳偉氏もこの説に従っている。<sup>(2)</sup> たしかに《津関令》にみえるように、下部から中央に法律の制定を上申する規定が、「置吏律」の手續きにみえており、その際にも「致」が文書であることは明らかである。

縣道官有請而當爲律令者。各請屬所二千石官。二千石官上相國・御史。相國・御史案致。當請。請之。毋得徑請。徑請者者。219訓金四兩。220  
(一一九—二〇簡)

陳偉氏は、《津関令》の「致」について、「伝」と「致」「書」は同時には使えず、「伝」あるいは「致」「書」を用いて関所を通過できると考えている。しかし魯国の御史の申請では、私馬では「書」を作成しているが、郎中の騎馬は「伝」でよいとあるように、もう少し別の解釈ができるようにおもふ。それは「伝」と、「致」「書」の機能は異なるのではないかということである。

五〇九、五〇三簡には、つぎのようにみえている。

十二 相國議。關外郡買計獻馬者。守各以匹數告買所内史・郡守。内史・郡守謹籍馬職(識)物・齒・高。移其守。及爲致告津關。津關案閱。509□□□等出。・相國・御史復請。制曰、可。503 (五〇九、五〇三簡)

これによれば、関外の郡が馬を買ったときには、内史や郡守に匹数を告げ知らせ、内史と郡守は馬の「識物・齒・高」を記した文書を確認する。同時に内史と郡守は「致」を作成して津関に告げ、津関ではそれを検査している。また五一三—一五簡にも、同じようなケースがみえる。

十五 相國・御史請。郎騎家在關外。騎馬節(即)死。得買馬關中人一匹以補。郎中爲致告買所縣道。縣道官聽。爲質(致)告居縣。受數而籍書。513馬職(識)物・齒・高。上郎中。節(即)歸休・[繇]使。郎中爲傳出津關。

馬死。死所縣道官診上。其詐（詐）貿易馬及偽診。皆以詐（詐）偽出馬令論。其<sup>515</sup>不得□及馬老病不可用。自言郎中。郎中案視。爲致告關中縣道官。賣更買。・制曰、可。515（五一三～一五簡）

こゝでは馬の文書に「識物・齒・高」と記している。この「識物・齒・高」は、懸泉置漢簡の「伝馬名籍」V 1610 ②10簡、11～20簡が参考となる<sup>(2)</sup>。

傳馬一匹。驪、牡、左剽、決兩鼻兩耳數。齒十九歲。高五尺九寸……（②…10簡）

私財物馬一匹。驪、牡、左剽。齒九歲。白背。高六尺一寸。小脊。補縣（懸）泉置傳馬缺。（11簡）傳馬一匹。

驪、乘、白鼻、左剽。齒八歲。高六尺。駕、翟聖。各曰全？廐。△□。（12簡）……尺六寸。駕。名曰葆囊。（13簡）傳馬一匹。騶。乘、左剽、決右鼻。齒八歲。高五尺九寸半。驂、名曰黃爵（雀）。（14簡）傳馬一匹。驪。乘、

左剽。八歲。高五尺八寸。中、名曰倉（蒼）波、柱。（15簡）傳馬一匹。騶。乘、左剽、決兩鼻、白背。齒九歲。

高五尺八寸。中、名曰佳□、柱、駕。（16簡）傳馬一匹。赤騶。牡、左剽。齒八歲。高五尺八寸。駕。名曰鐵柱。

（17簡）傳馬一匹。騂駒。乘、左剽。齒九歲。高五尺八寸。驂、呂戟、名曰完辛。△□。（18簡）私財物馬一匹。

驪。牡、左剽。齒七歲。高五尺九寸。補縣（懸）泉置傳馬缺。（19簡）

建始二年三月戊子朔庚寅。縣（懸）泉置畜夫欣敢言之。謹移傳馬名籍一編。敢言之。（20簡）

懸泉置の宿場では、管理する馬に対して名前をつけ、その身体的な特徴、齒による年齢、高さなどを記していた。

したがって「伝馬名籍」と《津関令》の表記は、その内容が共通することがわかる。ここから「致」や「書」などの

文書は、人が関所を通過する証明書ではなく、「名籍」と同じように馬などの随行品に対する証明書ではないかと推

測できる。この点を、もう少し検討してみよう。

大庭脩氏は、年代は後であるが、「致」の例として以下の資料をあげている。<sup>(23)</sup>

大庭脩氏は、年代は後であるが、「致」の例として以下の資料をあげている。<sup>(23)</sup>

■□ 出入關傳致籍

居撰三年吏私牛出入關致籍

(居延漢簡五〇・二六)

(敦煌馬圈灣漢簡8D M T六・五四)

(上欠) 軛穀輪塞外食者出關致籍

(同漢簡79D M T八・二七)

・元始三年十月玉門大煎都萬世候長馬陽所齎操妻子從者奴婢出關致籍

(同漢簡79D M T九・二七)

これらの内容は、吏の私牛の出入や、穀物を塞外に輸送する人、候長の妻子・從者・奴婢の出入りのように、玉門關の近辺にいる關係者に限られているという。そこで「致」は、長距離を通過する「伝」に対して、短距離の移動者への証明書ではないかと推測している。しかしもう一つ注目される特徴は、その対象が私牛や、輸送に必要な車、妻子と從者・奴婢といった、随行する人や物に限られていることである。これを「伝馬名籍」のような記載をもつ「致」「書」とあわせて考えると、この「致」は随行するものを記した証明書ではないだろうか。

すなわち關所を人が通行するには、公的であれ私的であれ、官府(公的な機關)が発行した「伝」が必要であった。しかし公的な往来でも、私物をもつ場合や、私的な往来で随行品をもつ場合には、「致」「書」と呼ばれるような証明書を追加したことが推測される。したがって「伝」「符」に対して、「致」「書」は規定をこえて随行する人や車馬、物品などを記した文書であり、その機能を異にするのではないかと考える。

### 三 關所の通行と漢墓簡牘

これまで、漢代の交通に使われる「伝」の形態を検討してきた。その結果、とくに公用出張の「伝」は、懸泉置漢簡の《失亡伝信冊》の第一簡が基本の形態として、漢代初期の類推になると考えた。ここには上段に「日付、身分、

名前、用件、交通の条件、通し番号」を記し、下段に「発給者の身分と名前、命令文」などを分けて記す形式であった。また私用旅行の「伝」は、これまで大庭脩氏などが、所属の官吏によってその条件を満たす証明をして、県廷が発給するとみなしていたが、その実物の形態には不明な点がある。

これに対して、これまで「伝」と同じようにみなされていた「致」は、公用出張や私的な旅行に際して、随行する人や車馬、物品などを記した文書にかかわるものと推測した。しかし実物の形態は、なお不明である。

それでは、こうした「伝」と「致」の形態をふまえて、もう一度、大庭脩氏が「冥土への旅券」と名づけた簡牘を検討してみよう。

まず江陵鳳凰山一六八号漢墓の竹牘（長さ二三・二、幅四・一、四・四センチ）は、「告地書」ともよばれ、つぎのような形態と内容をもっている。<sup>(24)</sup>

十三年五月庚辰。江陵丞敢告地下丞。市陽五

夫「隧自言。与大奴良等廿八人。大婢益等十八人。輜車

二乘。牛車一兩。騶馬<sup>すうば</sup>四匹。騶馬<sup>りゅうば</sup>二匹。騎馬四匹。

可令吏以從事。敢告主。

ここには文帝十三年（前一六七）に、江陵丞が「敢えて地下の丞に告ぐ」とあり、墓主（市陽五大夫の隧）の情報を知らせる擬制文書であることは間違いない。しかしこの竹牘は、明らかに公用出張の「伝」の形態ではない。それは先に《失亡伝信冊》でみたように、墓主の通行の条件を記しておらず、また発給者を下段に記していないからである。また私用旅行の証明と比べてみると、県レベルの丞が地下の丞に告げるといふ形式は似ているが、身分や用件を



証明するという内容ではない。かわって漢代の交通では、人が往来する「伝」とは別に、随行する人や馬、物品などに対する証明が必要であろうとみなした。とすれば、大庭氏が「冥土への旅券」と名づけた資料は、私用の旅行に関する「伝」の資料ではなく、随行品などを記す「致」「書」に関連する証明ということになる。その証拠に、ここには大奴と大婢、輜車、牛車、騶馬、駟馬、騎馬の数量が記されている。したがって、ここでは実際の交通を反映して、地下の交通にも随行品の擬制文書が作成され、それを地下の官府に伝える形式をもっていたことがわかる。これは大庭脩氏の見解を、さらに発展させたものである。

これと同じような形式は、随州孔家坡八号漢墓の木牘（長さ二三・幅三・三〇五・五センチ、告地書）にもみえて<sup>(25)</sup>いる。

二年正月壬子朔甲辰。都郷燕佐戎敢言之。庫嗇夫辟与奴宜馬・取・宜之・益衆。婢益夫・末衆。車一乘。馬三匹。  
正月壬子。桃侯国丞萬移地下丞。受數母報。 定手

ここでは県レベル以下の都郷と佐が、墓主とおもわれる人物（庫嗇夫の辟）に、奴婢や車馬を随行することを記し、桃侯国の丞を通じて、地下の丞に報告している。したがってこの木牘も、直接的に人が通行する「伝」の形態ではなく、県レベルの官が、随行するものを報告する資料である。

また江陵高台一八号漢墓では、実際に使われた形態を写した木牘（長さ二三・二、幅四・五センチ）がある。<sup>(26)</sup>

七年十月丙子朔庚〔子〕。中郷起敢言之。新安大

女燕自言。与大奴甲・乙。〔大〕婢妨徙安都。謁告安都受

名數。書到為報。敢言之。

十月庚子。江陵龍氏丞敬移安都丞。／亭手

(正面)

産手(裏面)

ここでは文帝七年(前一七三)に、県レベル以下の中郷の官吏が、新安の大女と一緒に、奴婢を安都に移したいという要望を記し、それを江陵龍氏の丞が、安都の丞に告げる形式となっている。注目されるのは、このとき正面と裏面に、「某手」という書写した人名が書かれていることである。これはすでに指摘されているように、里耶秦簡の木牘にみえる控えの形式と同じである。しかし大奴の名前が「甲、乙」と記号化しているのは、実際の文書そのものではない。この場合も、随行もしくは移動する奴婢の状況を、あらためて書写した形式になっているのであろう。

これに関連して、有名なのは馬王堆三号漢墓の木牘(長さ二三、幅三・五センチ)である。<sup>(28)</sup>

十二年二月己巳朔戊辰。家丞奮移主藏郎中。移

藏物一編。書到先撰具奏主藏君。

これは文帝十二年(前一六八)に、募主の家丞が、地下の主藏郎中に「藏物一編」を送る形式となっている。これを懸泉置漢簡の《伝馬名籍》と比べてみれば、その送り状を付けた文書とまったく同じ形式である。<sup>(29)</sup>したがって十二年木牘は、やはり随行品を送る文書とみなせるが、それは別に一編のリストを記していた。このように考えれば、こ

れまで副葬品のリストとみなしてきた遣策は、別の説明ができるかもしれない。<sup>(30)</sup>つまり遣策の意義は、ただ地下で生活するときに必要な物だけではなく、墓主が地下の世界に行くとき、その随伴する人や物品を証明する文書の役割を果たしていることである。

このように漢墓に副葬された竹牘や木牘は、漢代の交通を反映しながら、人の往来を証明する私用の「伝」とはちがう内容をもっている。それは、むしろ地下の世界に行く人が随伴するものを証明する擬制文書ではないかと推測される。

ところが漢墓の簡牘には、随伴品や物品のリストのほかに、少し内容のちがう文書がある。その一つは、雲夢龍崗六号秦墓の木牘（長さ三六・五、幅三・二センチ）である。<sup>(31)</sup>

・鞫之。辟死。論不當為城旦。吏論。失者。已坐以論。九月丙申。沙羨丞甲・史丙。免辟死為庶人。令自尚也。

これについて舂山明氏は、乞鞫の結果を記す公文書をモデルとしているが、人名が甲・丙のように記号化されているため、埋葬用の擬制文書と考えている。<sup>(32)</sup>ただし、もう一つ注意されるのは、むしろ大庭脩氏が指摘されていたように、私的旅行の「伝」を得るために必要な証明と共通している点である。つまりここでは、いま墓主は罪人ではなく庶民になったという内容を記しており、寸法は長い文書であるが、これも私的な旅行の証明に関連する文書と言えるのではないだろうか。

このような内容は、江蘇邗江胡場五号漢墓の木牘（長さ二三、幅三・五センチ、告地書）二枚にみえている。<sup>(33)</sup>

卅七年十二月丙子朔辛卯。広陵宮司空長前丞□敢言土主。広陵石里男子王奉世有獄事。事已復。故郡郷

（第一枚）

里遺自致移詣穴。卅八年獄計□書。從事如律令。

（第二枚）

胡平生氏によれば、この木牘の年代は、宣帝期の広陵王の紀年といわれるが、ここには広陵の宮司空と丞が、かつて獄につながれていた人物が、いま庶民に復していることを土主（地下の官吏）に報告している。したがって、これだけでは自分の証明にとどまっているが、これを私用の旅行に必要な罪人ではない条件とすれば、やはり冥土に行くときの通行に関する文書とみなすことができよう。

以上のように、漢墓に副葬された簡牘の一部には、墓主が随行する人や物品を記した文書や、罪人ではないことを記した文書がふくまれていた。これらは一見すると、別々の文書であるようにみえるが、これを関所などの通行に必要な「伝」や「致」「書」などと比べてみると、同じような形態をもつことが想定できる。

すなわち漢代では、地上の交通と同じように、墓主が地下の世界に行くときにも、一緒に随行品を記したリストや、墓主の身分を証明する簡牘を副葬する場合があつた。これらは、直接的に人の通行を証明する「伝」ではないが、やはり津関などの通行に必要な「致」「書」に関連する文書ではないかとおもわれる。これらは漢墓の一部にみられる簡牘であるが、それは死後の世界に対する習俗だけではなく、漢代で実際に行われた交通制度と文書の形態を反映するものであつた。この意味において、地上の「伝」と「致」による情報の伝達は、地下の世界においても通行が順調であることを願う心と共通していたのである。

このような推測が正しければ、大庭氏が地上の実際の交通と関連させて、地下の擬制文書を指摘されたことは、きわめて卓見であつたことがわかる。ただしこれまでは、「伝」と「致」の資料が少なかつたために、これを私用旅行の「伝」とみなした点に問題が残されていた。しかし通行の「伝」に関連して、漢墓の簡牘を、随行する人や物品、あるいは墓主の身分を証明する文書とみなすとき、それは漢代の交通事情を示していたのである。

## おわりに

本稿では、漢代の交通に使われる「伝」と「致」などの形態を検討した。その結果、とくに公用旅行に使われた「伝」は、懸泉置漢簡《失亡伝信冊》の第一簡がその基本となる形態ではないかと考えた。ここには上段に「日付、身分、名前、用件、交通の条件と、通し番号」を記し、下段に「発給者の身分と名前、命令文」などを分けて記す形式であった。そして公用の「伝」は、1 発給側の控えと、2 旅行者が携帯するものが想定されるが、実際には、3 関所や宿場で確認した控えや、4 特別に《失亡伝信冊》のような文書として残るケースがあった。これに対して、一ヶ所の津関を通過する「符」の形態は、これまでのように「六尺の符」を基本とする見解で問題はないとおもわれる。

また私用旅行の「伝」は、大庭脩氏などの研究をうけて、所属の官吏によってその条件を満たす証明をして、県廷が発給するとみなしたが、その実物の形態には不明な点がある。そして問題となるのは、「致」に対する解釈であった。

これまで「致」は、「伝」「符」と並んで、津関の通過に用いられたという見解があるが、その用途は「伝」と区別されているのではないかと考えた。つまり人の通行に必要な「伝」を所持していても、それとは別に私的な車馬などが付随していたり、私物を所持する場合には、別の証明が必要であったとおもわれる。本稿では、このような随行者人や車馬、物品などを証明する文書が「致」ではないかと想定してみた。漢簡《津関令》では、これを「致」「書」と表現している。これによれば旅行者は、車馬や騎馬、従者、器物などを私に随行するときは、それを証明する文書が必要であつたこと<sup>(35)</sup>になる。

さらに興味深いのは、大庭脩氏が「冥土への旅券」と名づけられた漢墓簡牘である。ここには地上の制度と同じように、地下の世界に通行するときは、墓主が随行する人や車馬、物品などを証明する文書を、地上の官吏が地下の官

吏に報告している。また馬王堆漢墓では、物品のリストを送るという文書を副葬している。これらは、地上の「伝」を示唆するのではなく、「致」「書」に関連する随行品の擬制文書とみなした。

また随行品の文書とは別に、墓主が罪人でないことを証明する文書をふくむ場合があったが、これも私的な旅行に必要な条件とみなせば、同じように地上の交通を反映する資料と考えることができる。

このように漢代の交通では、実際に使われた「伝」「符」や「致」とともに、漢墓に副葬された簡牘を分析することによって、それが制度の実態を理解することに役立つと考える。さらに簡牘の研究では、遺跡の文書と、古墓に副葬された資料を区別するのではなく、同じ社会における情報伝達のあり方が、別の形態で示された類似のケースとみることができる。これによって簡牘資料を、社会のなかで全体的に位置づける視点がみえてくる。つまり遺跡の簡牘が、実際に使われた文書やその控え（写し）であるのに対して、漢墓簡牘の一部もまた、地上の世界を反映した擬制文書だったのである。これらは今後とも、漢代の交通と情報伝達の問題として考察をつづけたいとおもう。

## 注

- (1) 簡牘資料の概略は、大庭脩『本簡学入門』（講談社、一九八四年）、同『木片に残った文字―中国木簡の世界』（大庭博子、二〇〇三年）、永田英正『居延漢簡の研究』序章（同朋舎出版、一九八九年）や、駢宇騫・段書安編著『本世紀以来出土簡帛概述』（台北市、万卷楼圖書、一九九九年）、同『二十世紀出土簡帛綜述』（文物出版社、二〇〇六年）などの紹介がある。
- (2) 李均明・劉軍『簡牘文書学』（広西教育出版社、一九九九年）、李均明『古代簡牘』（二〇〇三年）、汪桂海『漢代官文書制度』（広西教育出版社、一九九九年）のほか、永田英正『文書行政』（殷周秦漢時代史の基本問題）汲古書院、二〇〇一年）、初山明『中国の文書行政』（『文字と古代日本2』、吉川弘文館、二〇〇五年）などがある。
- (3) 思想史や出土文献については、李学勤『簡帛佚籍与学术史』（一九九四、江西教育出版社、二〇〇一年）、李零『簡帛古書与学术源

流』(生活・読書・新知三聯書店、二〇〇四年)、朱淵清『再現的文明・中国出土文献与伝統学術』(華東師範大学出版社、二〇〇一年)、朱淵清著、高木智見訳『中国出土文献の世界』(創文社、二〇〇六年)、浅野裕一・湯淺邦弘編『諸子百家へ再発見』一掘り起こされる古代中国思想』(岩波書店、二〇〇四年)など多くの紹介と研究がある。

(4) 松原弘宣『日本古代交通研究と文字資料』、拙稿『中国出土資料と古代社会』(以上、『資料学の方法を探る』4、二〇〇五年)。

(5) 大庭脩『秦漢法制史の研究』第五篇第一章『漢代の関所とパスポート』(一九五四、創文社、一九八二年)、同『漢簡研究』第二章『漢代の符と致』(『漢簡研究』同朋舎出版、一九九二年)、大庭脩著、徐世虹訳『漢簡研究』(広西師範大学出版社、二〇〇一年)など。

(6) 大庭前掲『木簡学入門』、同『冥土への旅券』(『漢簡研究』第三篇第三章)。なお徐世虹訳『漢簡研究』では、『前往冥府的通行証』と翻訳している。

(7) 全体の研究は、張家山二四七号漢墓竹簡整理小組『張家山漢墓竹簡』(二四七号墓)、『(文物出版社、二〇〇一年)、同整理小組『張家山漢墓竹簡』(二四七号墓)、『(文物出版社、二〇〇六年)や、朱紅林『張家山漢簡』(『二年律令』集釈)『社会科学文献出版社、二〇〇五年)、蔡万進『張家山漢簡』(『秦漢書』研究)』(広西師範大学出版社、二〇〇六年)のほか、『三国時代出土文字資料の研究』班『江陵張家山漢墓出土』(『二年律令』訳注稿その(一、二、三))、『(東方学報』京都七六・七八、二〇〇四・〇六年)、富谷至編『江陵張家山二四七号墓出土漢律令の研究』訳注、研究篇(朋友書店、二〇〇六年)などがある。

(8) 甘肅省文物考古研究所『甘肅敦煌漢代懸泉置遺址発掘簡報』、同『敦煌懸泉漢簡内容概述』(『敦煌懸泉漢簡釈文選』(以上、『文物』二〇〇五年五期)、胡平生・張德芳編撰『敦煌懸泉漢簡積粹』(上海古籍出版社、二〇〇一年)。

(9) 大庭前掲『漢代の符と致』のほか、李均明・劉軍前掲『簡牘文書学』など。

(10) 李均明『漢簡所反映的関津制度』(『歴史研究』二〇〇二年三期)、彭浩『『津関令』的年代与文書格式』(『鄭州大学学报』二〇〇二年三期)、楊建『西漢初期津関制度研究』(『楚地出土簡帛文獻思想研究』湖北教育出版社、二〇〇二年)、陳偉『張家山漢簡』(『津関令』涉馬諸令研究)、『(考古学報』二〇〇三年一期)、曹旅寧『『津関令』考述』(前掲『張家山漢律研究』)などがある。

(11) 大庭前掲『漢代の符と致』、李均明・劉軍前掲『簡牘文書学』のほか、初山明『刻齒簡牘初探—漢簡形態論のために』(『木簡研究』

一七、一九九五年)がある。

- (12) 富谷至「漢代の『伝』について」(『シルクロード学研究』二二、二〇〇五年)に整理がある。また「湖南长沙走馬楼出土万余枚西漢簡牘」(『中国文物報』二〇〇四年二月一八日)では、身分によって伝舎の規格が異なることを示す簡牘があるといい、「二〇〇三年长沙走馬楼西漢簡牘重大考古發現」(『出土文獻研究』第七輯、上海古籍出版社、二〇〇五年)では、「案傳舎二千石舍西南向。馬廄二所。並袤丈五尺。廣八尺。〔牝牡〕瓦各十九枚。竹馬仰四。井鹿車一具不見。磨壞敗」とある記事が、郡守など高級官吏を接待する伝舎と説明している。

- (13) 李均明前掲「漢簡所反映の関津制度」。また『奏讞書』案件3には、高祖十年(前一九七)七月に胡県から、臨淄県の獄史が他人の伝を使って、函谷関を抜けようとした事例がある。

・十年七月辛卯朔癸巳。胡状、丞意敢讞之。劾曰。臨淄獄史闌令女子南冠縞冠。詳病卧車中。襲大夫虞傳。以闌出關。・今闌曰。南齊國族田氏。徙處長安。闌送行。娶為妻。與偕歸臨淄。未出關。得。它如劾。・南言如劾及闌。……・十年八月庚申朔癸亥。大僕不害行廷尉事。謂胡詹夫讞獄史闌。讞固有審。廷以聞。闌當縣為城旦。它如律令。

かれは齊国の名族・田氏の娘を不当に娶って、関所を抜け諸侯王国に行こうとした。そこで県では、姦淫罪や、諸侯王国に逃亡させた罪などを議論しており、中央の裁可は「黔城旦」の刑とした。ここから曹旅寧前掲「《津関令》考述」では、高祖十年までに本条の規定がなかったとする。しかしこの案件では、関所の出入りよりも、諸侯王国への逃亡が問題となっており、すぐには関所の規定に結びつけられない。むしろこの案件からは、関所の出入りに関する規定があったとしても、諸侯王国の問題のほうが大きく、そこで奏讞の対象になったとも考えられる。

- (14) 大庭前掲「漢代の関所とパスポート」、李均明・劉軍前掲「簡牘文字」。中国社会科学院考古研究所『居延漢簡甲乙編』上下(中華書局、一九八一年)の番号による。

- (15) 李均明前掲「漢簡所反映の関津制度」。写真は、前掲「甘肅敦煌漢代懸泉置遺址發掘簡報」による。

- (16) 注(8)参照。このほか張德芳「懸泉漢簡中的“伝信簡”考述」(『出土文獻研究』第七輯、上海古籍出版社、二〇〇五年)、馬怡「懸泉漢簡“失亡伝信冊”補考」(武漢大學簡帛研究中心、二〇〇六年六月二二日)がある。両者には、若干の釈文の違いがあり、



たとえば馬氏は「書到。務(備)。毋解(懈)隨(惰)。如律令。」②876と解釈している。

- (17) 大庭前掲「漢代の関所とパスポート」では、『漢書』平帝紀の元始五年条に付けられた如淳注引く律文に、「律諸當乘傳。及發駕置傳者。皆尺五寸木傳信。封以御史大夫印章」とある記事を指摘している。この形式は、長さをものぞけば、懸泉置漢簡の宣帝神爵四年の木簡や、『失亡伝信冊』第一簡と一致している。

- (18) 張徳芳前掲「懸泉漢簡中的“伝信簡”考述」は、伝信の格式によって分類し、その写真を掲載している。これによって伝信の形態を知ることができるが、従者は車に同乗する者に限られており、他の随行品の記述はみられない。

- (19) 大庭前掲「漢代の関所とパスポート」。なお大庭氏は、私用の旅行者が用いた証明を「棨」とみなしているが、引用する居延漢簡一七〇簡でも「伝」とあるので、ここでは公用出張の「伝」に対して、私用旅行の「伝」としておく。

- (20) 陳偉前掲「張家山漢簡《津関令》涉馬諸令研究」。「張家山漢墓竹簡」釈文修訂本では、字句の修訂にとどめ、配列の変更をしていないが、彭浩「談《二年律令》中幾種律的分類與編連」、張家山漢簡研讀班「張家山漢簡《二年律令》校讀記」など、配列に関する論文を収録している。陳偉氏の復元では、「竹簡の整理番号・対照表」と出土位置によると竹簡が離れている場合があり、なお検討の余地がある。また《津関令》にみえる命令の形式は、大庭脩「張家山二年律令簡中の津関令について」(『史料』一七九、皇學館大学史料編纂所、二〇〇二年)、拙稿「張家山漢簡《津関令》と詔書の伝達」(『資料学の方法を探る』6、愛媛大学法文学部、二〇〇七年)などで説明している。

- (21) 李均明、陳偉前掲論文。このほか李天虹「漢簡“致籍”考辨」(『文史』二〇〇四年二期)がある。

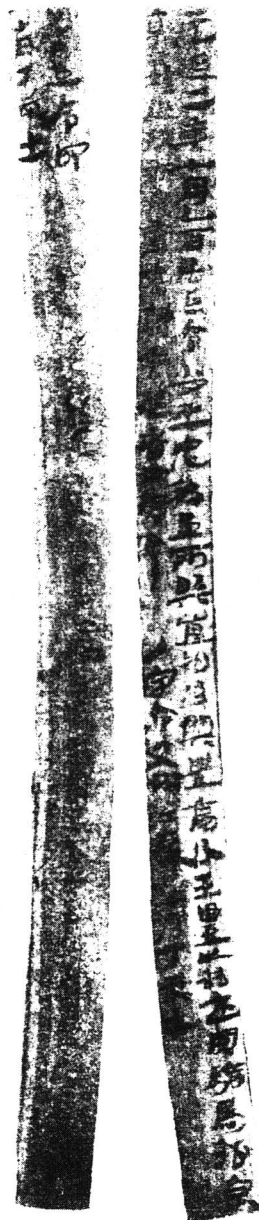
- (22) 前掲「敦煌懸泉漢簡积斂」八一〜八四頁。

- (23) 大庭前掲「漢代の符と致」。

- (24) 注(6)、湖北省文物考古研究所「江陵鳳凰山一六八号漢墓」(『考古学報』一九九三年四期)参照。このほか黃盛璋「江陵鳳凰山漢墓出土称錢衡告地策与歴史地理問題」(一九七七、『歴史地理与考古論叢』齊魯書社、一九八二年)、佐原康夫「江陵鳳凰山漢簡再考」(『東洋史研究』六一・三、二〇〇二年)などがあり、胡平生・李天虹「長江流域出土簡牘与研究」(湖北教育出版社、二〇〇四年)は、秦漢墓の竹牘・簡牘を全体的に考察している。

- (25) 前掲「長江流域出土簡牘与研究」、湖北省文物考古研究所・隨州市考古隊編著『隨州孔家坡漢墓簡牘』（文物出版社、二〇〇六年）。
- (26) 湖北省荊州博物館編著『荊州高台秦漢墓』（科学出版社、二〇〇〇年）。
- (27) 初山明「湖南龍山里耶秦簡概述」（『中国古代訴訟制度の研究』京都大学出版会、二〇〇六年）。
- (28) これまで陳松長「馬王堆三号漢墓木牘散論」（『文物』一九九四年六期）などの研究がある。なお湖南省博物館、湖南省文物考古研究所「長沙馬王堆二、三号漢墓」（文物出版社、二〇〇四年）では「藏」を「葬」と読んでいる。
- (29) 前掲「敦煌懸泉漢簡釈粹」。また永田前掲「居延漢簡の研究」、同「簡牘の古文書学」（『近江歴史・考古論集』滋賀大学教育学部歴史学研究室、一九九六年）では、帳簿などに送り状を付けることによって、古文書になることを指摘している。
- (30) 遺策については、彭浩「戦国時代の遺策」（『簡帛研究』第二輯、法律出版社、一九九六年）がある。
- (31) 劉信芳、梁柱『雲夢龍崗秦簡』（科学出版社、一九九七年）。中国文物研究所、湖北省文物考古研究所編『龍崗秦簡』（中華書局、二〇〇一年）には、簡牘概述のほか、李学勤「雲夢龍崗木牘試釈」、黄盛璋「雲夢龍崗六号秦墓木牘与古地策」、胡平生「雲夢龍崗六号秦墓主考」、劉国勝「雲夢龍崗簡牘考釈補正及其相關問題的探討」などを収録し、釈文に関する考察がある。
- (32) 初山明「龍崗六号秦墓出土の乞鞵木牘」（前掲『中国古代訴訟制度の研究』）。
- (33) 前掲「長江流域出土簡牘与研究」四七一頁。
- (34) 木牘には「卅七年」「卅八年」という年代があるが、これは広陵厲王の紀年で、宣帝本始元年（前七二）、本始二年（前七一）にあると考証している。
- (35) 日本の養老公式令過所の条では、A通行の理由など、通過する関と目的地、B随行の人、物、馬牛など、C年月日、発給する官司などを、過所（通行証）の条件としている。ここでは人の通行と、随行する人・物が一緒になっている。これは漢代で分かっていた条件が、日本の規定のもとになった唐代には、すでに一緒の条件になったものか、あるいは漢代でも一緒に記載される場合があるのかは、なお検討の余地があろう。程喜霖『唐代過所研究』（中華書局、二〇〇〇年）、永田英明『通行証』（『文字と古代日本3』、吉川弘文館、二〇〇五年）など参照。

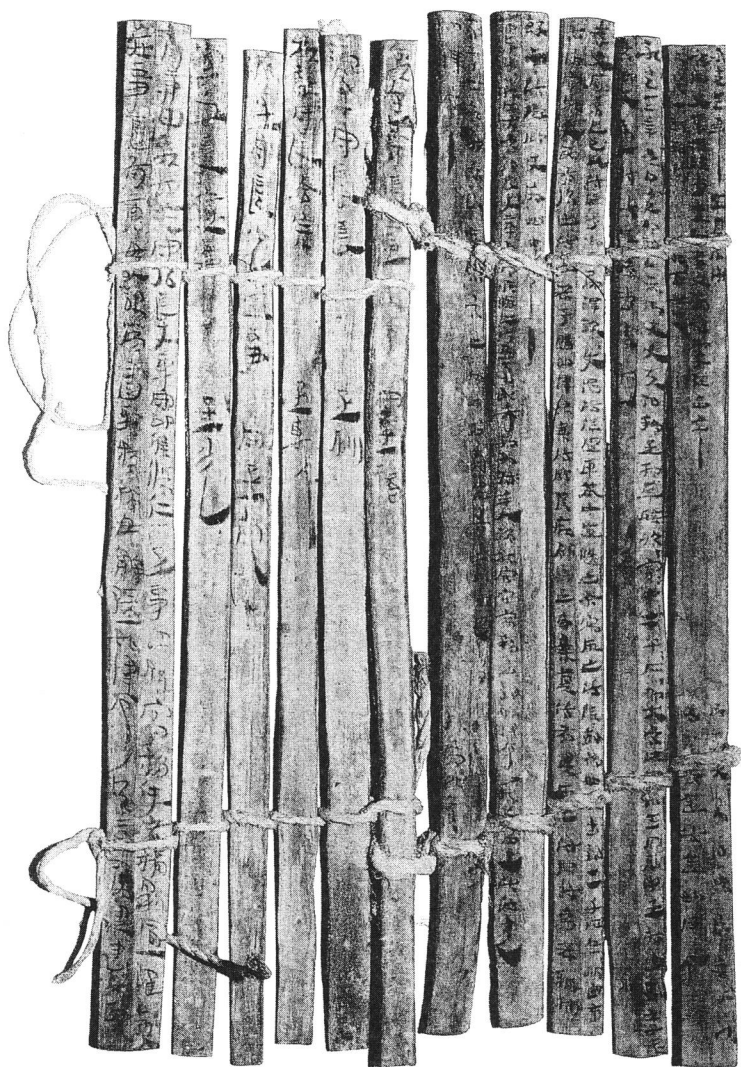
『居延漢簡甲乙編』上冊（中華書局、一九八一年）一七〇・三A、B



敦煌懸泉置《伝信》簡、I 90DXIT0309③：237（『出土文獻研究』第七輯、二〇〇五年）



敦煌懸泉置《失亡伝信冊》 II 90DXT0216② 866-876



江陵鳳凰山一六八号漢墓・竹牘256（『考古學報』一九九三年四期）



『長沙馬王堆二、三号漢墓』（文物出版社、二〇〇四年）木牘



〔付記〕 本稿は、二〇〇六年一月一〇日に「中国簡帛学国際論壇二〇〇六」（於武漢大学）で報告した論文の日本文にあたるものである。